

日々往来

福永 憲高



今から約半世紀前、「ゲゲゲの鬼太郎」が初めてテレビ放映された1968年(昭和43年)、日本の犯罪史に残る「3億円事件」が発生した。ある会社のポータス用現金が銀行から運ばれる途中に奪われた事件で、容疑者のモニターシユ写真を、記憶の方も多いただろう。

事件は未解決のまま時効を迎えたが、この事件は、給料の預貯金口座への振り込み普及のきっかけになったと言われている。

スマホでピッ!

る。当時、会社は銀行から現金を引き出し、従業員一人一人の給料袋に現金を詰めて手渡していた。今から考えると、大変な手間暇だ。

給料の振り込みは、言ってみれば「給料のキャッシュレス化」であり、現在推進されているのは「決済のキャッシュレス化」だ。推進理由の一つに、現金を扱うコストの問題がある。「3億円事件」のような盗難のリスクだけでなく、小売店や飲食店では、毎日、釣り銭を用意し、間違わないように現金を受け渡しし、営業後にレジを締めて現金と計算が合っているか確認、金融機関に入金する事務に人手が割かれている。全国の金融機関のATMの維持管理にも、多くのコストがかかっている。

こうしたコストはあまり意識されない「見えざるコスト」だ。現金を扱うことで小売業や外食産業、金融界で年間8兆円にも上るコストが発生しているという試算もある。これをみんなで負担していることになる。決済のキャッシュレス化は、コストを軽減するだけでなく、決済のデータを収集し活用することで大きなビジネスチャンスにつながることを期待されている。

先日、あるセミナーでキャッシュレス決済の話をした際、「スマホでピッ」と買い物ができてしまうと、お金のありがたみがなくなる」といった「そこはか」とない違和感」とでもいうような感想を漏らされる方がいた。それを聞いた時、給料の口座振り込みに「振込明細一枚だけで、給料日のありがたみがなくなってしまう」という意見があったのを思い出した。

お金に対する考え方は千差万別だ。
(日本銀行鳥取事務所長)